



大野権現山  
大湊山  
道後山  
吾妻山  
大佐山  
比尋山  
七国見山

吉和冠山登山

広島  
山百

紀行文

山中與隆

YAMANAKA TOMOTAKA

# 『広島百山』

---

山中與隆

## 目次

### 『広島百山』 1

第一回…大野権現山（おおのこんげんやま） 1

第二回…大潰山（おおづえやま） 14

第三回…道後山（どうごやま） 39

第四回…吾妻山（あづまやま） 46

第五回…大佐山（おおさやま） 50

第六回…比婆山（ひばやま） 62

第七回…七国見山（ななくにみやま） 70

編者あとがき

75

# 『広島百山』

山中與隆

1

第一回…大野権現山（おおのごんげんやま）  
（六九九・五m）佐伯郡佐伯町・大野町

二〇〇一年四月十一日（水）

ついに十年計画の『広島百山』が始まった。三月三十日が最初の計画日だったが、曇りのち雨の天気予報で前日のうちに中止を決めた。おりから春にしては第一級の寒波が来て、実際に三十日の朝は湯来では一面銀世界であつた。さすがに雪は昼までに解けたが気温は低く、予報の雨は夕方遅くなつて降り出したが中止は妥当であつたとO夫妻ともども確認した。

そのときの電話では、次週の後半にと申し合わせた。我が家の都合で日程がとれず、結局今日、四月十一日の実施となつた。今日も天気予報は晴れのち雨であつたが、前日の打ち合わせで、雨は早い時間には降り出さないと判断して、集合時間を三十分早めて実施を決めた。帰るところに雲が厚くなつてきたことを考えると、二十分早めたのも正解であつた。日中は終始花曇の好条件のなかで行程を終えた。

大野権現山は、『ひまわり』（義母がお世話になつてゐる介護施設）に行くときいつも玖島分れあたりで眺める山で、昨年夏、初めてその道を通つたときに、格好のいい山があると思つたその山である。玖島分れ側からも登れるが、今日は『おおの自然観察の森』からのルートを行つた。

私がこの計画を思いついたときすぐに〇夫妻にも手紙で呼びかけ、おりかえし電話で参加を言つてき



てくれたものである。だからもちろん先に書いた中止、実施の打ち合わせも〇夫妻と連絡を取り合つてのことである。

彼らは、この山は四度目くらいとのことで、道も知り尽くしている。私たち夫婦は、彼らの先導で今日一日を踏破した。〇夫妻は、自分たちは何度も来た山であるにもかかわらず、単なる案内という感じではなく、自分達も十分に楽しんでいように見える。

た。

『おおの自然観察の森』の駐車場に九時半集合で、『広島百山』の第一歩は始まった。それに先立って、私達は八時半に家を出、県道四十二号線の玖島の『セブンイレブン』でおにぎりなど弁当と飲み物それに簡易かっぱを仕入れた。玖島分れから県道三十号線を約一・五キロ西進、河津原交差点を左折して再び県道四十二号線を南下した。渡ノ瀬貯水池の東岸を

約五キロ走ってから、大野町方面への県道二百八十九号線に入った。この県道に入る直前のカーブで大型トラックとの離合に時間を取られた。後で分かったのだが、これで五日市の二宅から二号線バイパス、宮内、玖島わかれのコースでやってきたO夫妻の車がわれわれに追いつき、この後『おおの自然観察の森』までの道を私たちの後ろについて走っていた。したがって両者同時に、定刻九時半に駐車場に着い

た。

挨拶を交わし、登山靴に履き替え荷物を整備し、自然観察センターまで行つて入園の記帳をしてからいよいよ登山である。

九時四十五分に歩き始めた。花を見ながらゆつくりしたペースで歩いた。いろいろな花の名前が語られたが、私はその方面に疎く、忘れたので記載は省く。スマイレ、桜、若葉と見間違えそうな若緑色の小

さな花をつけた白××、白い花びらで遠くから目立つ××××等々、またつつじが輝くばかりの真新しい花をつけ始めていたのが鮮やかだった。椿が登り始めてから頂上に至るまでかなり多く、まだ萎びるには間のあるような生きいきした色の花も残っていた。

登山道は良く整備されていて、登りもゆるやかとあって、おにぎり山と権現山の分岐点には難なく着

いた感じであつた。分岐点を左にとつて権現山頂上を目指す。若干最後の登りをがんばつたら、頂上であつた。着いたのは十一時五分で、自然観察センター前から一時間二十分である。頂上には大きな岩が幾つもあり、北側の眼下に玖島分れの交差点あたりが開けている。遠くには大峯山、阿弥陀山そして東郷山がはつきりと見えていた。

十一時半ころまで積もる話をしながら休憩した後、

おむすび山に行つてから弁当にすることになり、再び山歩きが始まつた。約五十分でおむすび山に着いたが、途中かなり降りたり登つたりの行程であつた。妻はここが一番きつかつたとあとで言つていた。

花曇の暑くも寒くもない快適な中でおにぎりを食べた。今回の行程では、山中では他の登山者にいちども出会わなかつた。弁当も最後までわれわれだけでゆつたりとできた。

そこからは四十分くらいの下りで、花を見ながらゆつくりと歩き、午後二時ごろ自然観察センターに着いた。駐車場から、登った山を見上げると、一番左側の権現山のピークから右に少し高くなつたところを越えて、左側の第二のピークおむすび山（六五二m）へと、かなりの縦走をしたことが振り返られた。

そこで所員と立ち話を少しした後、駐車場で次回



を約して〇夫妻と分かれた。

われわれの帰りは来た道を玖島分れまで戻り、そのまま宮内に出て、『ひまわり』により、五日市の『ビツク』で買い物をして五時ちよつとすぎに家に着いた。着いたときおじいちゃんは、庭の草刈をしていた。

なお次回は、五月の連休明けから九日までの間に、道後山に行こうという案が申し合わされた。双方と

も次回に対して積極的な姿勢であつた。(完)

第二回…大潰山（おおづえやま）

（九九七・五m）山県郡芸北町

二〇〇一年五月十二日（土）

『広島百山』の第二弾である。第一弾が四月十一

日だったからちようどあれから一ヶ月後ということになる。

妻が十日、正確には家に着いたのが日付の変わった一時前だったから十一日ということになるが、ダリネゴルスクから帰って、来週の日曜日二十日からウクライナに行く間を縫っての日程である。快晴に恵まれ、花の時期にもぴったりでこの第二弾も成功裡に終わった。この選択については、O夫妻はいろ

いろ考慮して決めてくれたようだ。天気、熊、花の時期それに妻の忙しさなどをである。

大潰山は国道百八十六号線の広島県と島根県との県境にある。この峠は傍示峠または棒路峠といつて、峠の向こう側は島根県那賀郡金城町である。国道百八十六号線が浜田に近づくと、浜田自動車道や県道五号線と接近する。昨年県道五号線を歩いて浜田に入っていくとき、左から近づいてきた道路を轟々と

音をたてて車が行き交っていたのがこの百八十六号線だったのだ。傍示峠から浜田まで三〇キロくらいで、今日家からここまで来るのよりもずっと近い。

実は今年の徒歩旅行の計画を立てるときに、大変な山の中ばかりで、宿はおろか昼飯にもありつけないだろうと敬遠した道路である。しかし走りながらざっと見たところ、昨年実際に歩いた大朝、瑞穂ハ일랜드、旭、浜田の県道コースよりも開けている

くらいであつた。もつとも家から浜田までの距離は、  
どちらも百キロ前後とほぼ似たようなものである。  
もう一度歩くこともないだろうから、あまりこだわ  
らないでおこう。

大佐スキー場の駐車場のはずれに、ここから島根  
県という表示がある。その駐車場に車を止め、そこ  
から出発して同じ所に戻ってくる登山コースである。  
今日はかなり登山者が多いが、みな同じコースのよ

うだ。

家からスキー場の駐車場まで六〇キロ以上あるの  
で、余裕を見て七時四十分に家を出たら八時五十分  
には着いてしまった。一時間に三〇キロとする一般  
道の所要時間の計算方法により、ゆとり時間も加え  
て二時間半を見積もったのである。ところが道路は  
広く、車は少なくすいすい走って、平均時速六〇キ  
ロ近くで行ったことになる。往きは加計経由であつ

た。

集合時間の十時までの間、妻は車で昼寝をしたが、私はスキー場の草原を歩き回ったり、立派なレストランでトイレをしたりして時間を潰した。大潰山の南西約三キロに大佐山一六一九mが対峙していて、その両座の間を国道百八十六号線が通っている。スキー場の広々した草原スロープを少し上の方にあがると大潰山は手前の傍示山九六八mの向こう側に見



えてくる。しかし、大佐山はスキー場のスロープのピークに遮られて見えない。

十時少し前、妻がトイレに行つたときにO夫人に出会つて、合流した。この日は土曜日、快晴、この山の名物ツツジの最盛期とあつて、バスツアーを含めて相当の人であつた。土曜日だがそれでもやはり中高年がほとんどといった感じであつた。

十時ちようど出発。バスツアーの五十人くらいが、

駐車場の向こうの方で準備体操をしていて、いまにも出発しそうにしていた。彼らの後をのろのろ歩くのはいやなので、こちらはもとより準備体操などせず、すぐに歩き始めた。陽は照っているが、いかにも高原といったややひんやりした爽やかな風と新緑の中である。二キロ強歩いて、十時三十五分登山道にとりついた。

○夫人の植物の解説を聞きながら緩やかな沢沿い

の雑木林帯を行く。余談だが、O夫人は草木については実によく知っているが、鳥については専門外のようにある。

やがて急登となるがその区間はさして続かずまもなく頂上に着いた。登山口から四十五分くらいだつたろうか。

バスツアーの連中はガイドの解説を聞きながら後ろを来ていたが、山道に入ってからには声も聞こえな

いくらい差がついたようだった。私たちは途中、我々よりも高齢と見えるグループを一組追い抜いた。とは言つても、O氏たちの登山ペースは決して先を急ぐような鍛錬タイプではなく、ゆつたりと草木や周囲を楽しみながら行くもので、われわれ、とりわけ妻にはちようど良いペースである。

バスツアー組は、われわれが頂上の南側百八十度くらいの展望がいいツツジの中で弁当を食べ始めた

ころに、ようやく到着した。我々が弁当を食べているすぐそばにどやどやと集まって記念写真を撮り、集合時間を決めて弁当解散をした。それぞれが弁当場所を決めるまで、ちよつとの間ざわついていたが、やがてそれぞれどこかに収まって静けさが戻った。それでも頂上付近には相当の人数が弁当を開いており、今週の私の独り歩きでの、風の音以外なにもないというのに比べると、安心感をもてるくらいの人

のけはいであつた。

今回は、ちらし寿司のおにぎりを作つて行つた。水も家の井戸水をペットボトルに入れていった。山ではこれらが十分においしい。Oさんからは自前のタケノコをおいしく煮たものをつつかせてもらい、こちらからは剥いていったリングゴをお裾分けした。面倒に感じない程度の弁当交流をしながら、ひとしきり周囲の山を地図で確かめた。西南側にこの頂上

に続いたように傍示山九六八m、その向こうすぐの所に大佐山一〇六九m、南南西に掛頭山一一二六mとその奥に臥龍山一二二三mが近い。臥龍山の左側に深入山一一五三mがのぞいている。さらにやや遠く聖山と思われる端正な姿も確認できた。大峯山、さらには吉和冠山なども距離的には見えそうだし、それぞれ特徴があるので探したが、どうも臥龍山のかげになっているようで、見ることはできなかつた。

○夫妻は北東側に行つたことのある山々があるよう  
で、あれこれ評定していた。朝よりも雲が増えては  
いたものの、相当遠くまで見える絶好の見晴らし日  
和である。頂上から北西側は高い山はなく開けてい  
て、遠く日本海が春霞に紛れるように見えているよ  
うであつた。

帰りは、まずツツジの林の中を南西の傍示山まで  
縦走する。傍示山は大潰山よりも約三十メートル低



い山で、ほんの少し鞍部に下りてからもう一度頂上まで登る。この間ずっとツツジの中の道である。蕾から真っ盛りを過ぎかけたものまでいろいろであった。まだ蕾が相当あつたから、ちようどいい時に来たと思う。『ひろしま百山』の本によるとここに自生の大群落をなしているのは、ミツバツツジ、ベニドウダン、レンゲツツジで一万株と書いてある。幹はどれも押し倒されたように曲がっていて、雪の重み

を受けながら生きていることを物語っている。

傍示山からの下りは途中、掴まりロープが張ってある急坂を通らなくてはならなかつた。それでもゆつくり花を見ながら約一時間の縦走と下山であつた。下りたところは大佐スキー場の駐車場の一部である。時刻は一時半。登りはじめから三時間の登山であつた。

大潰山の標高は先月の大野権現山よりも三百メー

トル近く高いのだが、実際に歩いた距離や、比高差が小さかったためか、あるいは登りのきつさが無かったためか、体力的には楽であつた。妻もそう感じたようだ。もちろんこの数日間、大峯阿弥陀縦走など猛烈に歩いている私にとっては、散歩程度のものであつた。

○夫妻は、このあたりに来たときは美又温泉に寄つて帰ることがあると言つていたが、この日は息子

さんが松江から帰っているの、すぐに帰ることにしていた。美又温泉は旭温泉の近くで、徒歩旅行のとき『風の国』という看板があつたが、そこではないかと思われる。

○夫妻と別れて、帰途についた。帰りは八幡高原、聖湖、深入山を通つて帰ることにした。三段峡入り口まではよかつたのだが、それを過ぎたところで間違つて県道二百九十六号線に入ってしまった。立岩

ダムのある道である。昨年おじいちゃんも一緒にドライブした三段峡の帰り、紅葉がきれいだった道だ。当然新緑も素晴らしい。しかし、早く帰って明日のジュノーの会との打ち合わせの準備がしたいという妻と、少し喧嘩になった。なにしろこの道路は約二五キロの曲がりくねった狭い山岳道路なので、おそらく一時間くらいは家に帰り着くのが遅くなったと思う。しかし、かつてクレーム処理でH氏と来た立

岩ダムで車を止めて、写真も撮った。

吉和インター近くの国道百八十六号に出る。国道に出る少し前にある住建美術館の売店によってトイレを借り、きやらぶきを六百円で買った。

住建美術館から家までのコースは、国道百八十六号を南下して玖島分かれ経由か、すぐに国道四百八十八号線のもみの木森林公園経由か、百八十六号を北上して筒賀から県道四十一号線、いわゆる五日市

筒賀線經由かでもめた。距離は断然近いが、狭い山岳道路という理由でもみの木經由は没。残りのふたコースでは筒賀經由の方が近いだろうということ、ようやく決まった。そこからの道路はとてもよくて、約四十分で四時半に帰着した。あとで地図を調べると、玖島分かれ經由は約四五キロ、筒賀經由は約三五キロである。どちらもいい道路なので、十分くらい筒賀經由の方が速かったことになる。ちなみにも

みの木経由は約三一キロで、最も近いことには違いないが、『断然』というのは当たっていなかつた。

一旦家によつて妻を降ろし、私はアルパークのヤマダデンキで注文してあつたスピーカーを受け取り、楽々園のジュンテンドーにまわつて白樺の苗木を買うことにして、そのまま出かけた。

白樺の苗木というのは、今日山歩きの最中、〇夫人から得た情報に基づくものである。苗木売場で探



したが、白い幹の苗木はどこにもなくて、売り切れ  
たのかと諦めかけたが、念のため忙しそうな店の人  
を捕まえて訊いたらすぐにわかった。白樺の苗木の  
幹は白くはなかつたのだ。やや緑を帯びた茶色で、  
白い模様が少し入っている。しかし、その模様の白  
は純白ではなく、幹を白く見せるものではない。白  
い幹の苗木を一生懸命探して、目の前にあるのを見  
逃したのである。教えられてみれば、はつきり『白

樺』ときれいに印刷された札がぶら下がっていて、それには白い幹の成木のカラー写真までちゃんと着いていた。千八百円で幹の直径一・五センチ、高さ七十センチくらいのしつかりしてそうな苗木を一本買った。

今日、五月十二日はわれわれの三十四回目の結婚記念日。偶然ながら記念植樹となる。そういえば、大佐スキー場の駐車場の大きな案内地図板の近くで、

まさに今日結婚したばかりのカップルの記念植樹があり、二〇〇一年五月十二日、じゅんじ、のぶこと  
 かいとう木の立て札がしてあつた。  
 (以上)

第三回…道後山(どうごやま)

(二二六八・九m)、岩樋山(いわひや

ま)(二二七一m)比婆郡西条町、東条町

二〇〇一年七月十四日（土）

最初六月二十三日の予定だったが、雨で今日に延期された。昨日まで雨だったが、予報どおり今日は晴れた。ただし大気の状態が不安定とかで、妻が盛んに雷を心配した。出かける直前になっても、雷が心配だから中止を提案するよう迫ったほどである。出発の七時ごろ湯来町の上空は晴れ。妻の心配を押

し切つて出発した。

五日市インターまで約三十分、五日市インターから中国道七塚原サービスエリアまでが約一時間、ここに九時集合であつた。サービスエリアを出て間もなくの庄原で降りて百八十三号線で道後山登山者駐車場に着いたのが十時少し前。岩樋山の南側中腹を巻いてまず道後山頂上に向かった。十一時十五分ころ着いて、弁当を食べた。十二時ごろ降り始めて、

岩樋山頂上を経て駐車場に着いたのは十二時五〇分  
ころ。そこで解散。私たちは十三時五分に駐車場を  
出発。百八十三号線で三次に出て、五十四号線を南  
下、可部から百九十一号線で飯室、久地、戸山を經  
て、十六時五七分に帰着した。湯来道後山間は、一  
部高速利用で三時間、一般道だけだと四時間であつ  
た。もつとも、今日の一般道は、まったく渋滞など  
無かつた。

道後山は、その昔S先生たちとテント一泊で行ったことがある。S先生は子供二人連れ、われわれは赤ん坊の娘Tを抱いての山行きであつた。テントはやや低いところに設営し、カンカン照りの暑い日だつたが、頂上は霧が吹きつけて寒く、敷物のシートを被つて、霧が晴れるのを待った。十時過ぎても晴れてこないで諦めて、テントの位置まで戻つた。そこはやはりカンカン照りであつた。今日道後まで

のアップローチでも、登山道でもほとんどその時の場所に関する記憶は蘇らなかつた。かすかに一、二おぼろげに思い出しそうになつた程度であつた。

道後山と岩樋山は一連の草原の起伏である。雨の後であることは道の湿り具合からわかつたが、碎石が敷かれた登山道は、歩きやすく快適であつた。三六〇度の展望は素晴らしく、また花の種類が多く美



しい色を随所に見せていた。雲に霞みかけていたが、大山が確認できた。

心配していた雷が寄り付く前に下山した感じである。本当に雷になったかどうかはわからないが、北の上空には積乱雲が発生していた。もう一つ、妻の最近のトレーニング不足も、楽なコースであったため、特に問題とならなかつた。

今日も、あらゆる点で『広島百山』は成功した。

○夫妻の企画に感謝。

次回第四回は、吾妻山で八月十三、十四、十五のころか、九月一日の予定と決まった。(おわり)

第四回..吾妻山(あづまやま)

(二一三八・八m)比婆郡比和町

二〇〇一年八月十五日(木)

雷に遭わないように午前中のうちに下山するスケジュールで、朝早く行動した。八時半に中国自動車道の七塚原サービスエリア集合。前回道後山のときと同じ集合場所だが、集合時間は三十分早い。

標高一〇〇〇メートル付近の国民休暇村駐車場からの登山である。最近ハードな歩きが苦手となつてゐる妻にとつても、手ごたえがなさ過ぎたほどの、散歩コースであつた。しかし、ここも花の多い山で

快適な散歩であつた。池の原から登つてキャンプ場に降りてくる周遊コース。全コース景色も整備状態もいい道であつた。頂上の展望も素晴らしく、猿政山、竜王山、伊良谷山、毛無山、烏帽子山、比婆山、遠くは大山、宍道湖、日本海が見える。今日は、前述のうち日本海と大山以外はすべて見る事ができた。

十時に駐車場から登り始めて、十一時に頂上で弁

当。十二時下山開始、花を愛でながら十三時前駐車  
場着。帰りは高野町、三次、広島経由で高速を使わ  
ずに走った。五日市の『ビック』で夕食を買って家  
に着いたのは十七時であつた。おじいちゃんは『ひ  
まわり』からまだ帰っていなかつた。

次回第五回は、九月二十二日予定で大佐山となつ  
た。

第五回…大佐山（おおさやま）

（二〇六九・〇m）、鷹巢山（たかのす  
やま）（九四三・三m）山県郡芸北町

二〇〇〇一年九月二十二日（土）

予定通り実施。天気予報は降水確率ゼロパーセントの晴と言っていたが、九時半に大佐山スキー場の駐車場に着いたときは空いっぱい雲が出ていた。

何よりも寒かった。近くの道路の温度計は十五度を示していた。

私の車に四人乗って、まず鷹巢山の登山口に向かった。車止めの位置を迷って別の道に入り込んだが、引き返して正しい場所を見つけることができた。そこから歩き始めて、わかつて見ると十五分もかからないで鷹巢山の頂上に達することができると、広い林道を延々一時間歩いてから、おかしいことに気

づいて引き返した。途中熊の糞や動物の足跡を多く見つけて、一時は緊張して歩いた。熊の糞だと思つたのは、引き返したときによく見ると、どうやら狸の糞場であることがわかつてみなは安心した。家の畑で狸を餌付けしているO夫妻の話によると、狸は同じ場所に重ねて糞をする習性があるのだそうだ。

一時間かけて戻って見ると、木にかかった小さな黄色い札に県境広場、大佐山登山口などの案内があ



った。ガイドブックには、この黄色い札のこともちやんと書いてあつた。

県境広場に戻つたとき、六、七人のグループが大佐山のほうから広場に到着しており、われわれの迷つた話を笑いながら聞いていた。しかし、迷つた為に二時間歩いた林道は素晴らしい雑木林の中で、しかも高低差はあまりなく、快適なトレッキングができたことを四人ともかえって喜んだ。

県境広場から右に分かれている（車止めから来た  
ら左側）林道に入って鷹巣山を目指した。この林道  
も往路には全く気がつかなかった。だいたいこの県  
境広場なるものがそれと思わなかったのである。ガ  
イドブックを読み直すと、『車止めから一五分で峠の  
県境広場』となっている。これを正しく読んで注意  
しておけば、先に書いた黄色の札にも、例え小さい  
とはいえ気がついたはずである。

さて、鷹巢山への林道に入つて間もなくあるとい  
う右への分岐が見つからない。そのまま十五分くら  
い歩いたろうか、南西側の展望がよい場所に出た。  
鷹巢山は後方すぐ見上げるところにある。でも、十  
二時半になつていたので弁当にした。青空、ススキ、  
遥かな山並みと素晴らしい弁当となつた。弁当後、  
県境広場に引き返したのだが、広場の見えそうなど  
ころに、左側（広場から来たら右）に入る細い林道

があつた。これも往路に見逃して通り過ぎたのだ。  
『四〇メートル』と書いてあるガイドブックを信じ  
ていれば見逃さなかつたはずだった。そこを入つて  
『四〇メートル行つて左』の記述、ここは見逃さず  
に左側の小道に入つて、間もなく鷹巢山の頂上に出  
た。展望の利かない狭い頂上で、さっきのグルー  
プが弁当を食べていた。われわれが到着すると、  
「何処に行つていたのですか」

と聞かれた。われわれは彼らより先に、

「鷹巣山に行きます」

と言つて林道に入つていったのだから当然の質問であつた。先頭で到着したO氏が、

「見晴らしのいいところで弁当を食べてきました」と答えていた。

「えっ、見晴らしがいいところがあるの」

「それはどこ？」

などと声があがった。われわれはすぐにそこを後にした。県境広場に戻りながらおかしさを我慢するのに苦労した。私が、

「『こんなところで弁当食べてるの』って言ってやればよかったね」

と言うとO氏が、

「おしも『見晴らしのいいところで弁当を食べてきました』って言うのに、すばやくまわりを見回して、

見晴らしがよくないことを確かめてから言つたんだ」

と言う。妻は、

「今日の何度もの道迷いは、神の絶妙な配剤だね」と言う。余分に歩き、余分に時間を費やしたのがいずれも素晴らしい内容であつたという幸運にみな満足していたのである。

県境広場から熊笹に覆われた山道を二時間半歩い

て今日の主目的地である大佐山の頂上に達した。頂上は素晴らしかった。何が素晴らしかったかと言うと、快晴の中での三六〇度の展望、日本海、日本海に浮かんだような益田方面の岬、三瓶山などなどである。双眼鏡で見ると日本海の白波まで見えた。地図と照らしながら周囲の山々を確認するのに飽きなかったが、すでに三時半を過ぎていたので下山にかかった。スキー場を三十分下って駐車場に着いた。



○氏の車で鷹巢山の車止めまで行った。そこで、次回は十月二十一日、日曜日に、紅葉を期待して比婆山に行くことを決めて解散した。

『広島百山』これまでの五回の中では最も長い歩きとなったが、満足度も高かった。(第五回完)

## 第六回…比婆山（ひばやま）

（二二六四m）比婆郡西城町

二〇〇一年十月二十六日（金）

もともと二十一日（日）の計画が、まずO氏の都合で二十八日（日）になり、さらにわたしの都合で二十六日（金）になった。結果的には二十一日はともかくとして、二十八日は低気圧の通過で大荒れの

天気となり、一方二十六日は穏やかな晴れだったのだから、この変更は実に幸運であつた。金曜日というのは、二次就職の勤めに出ているO氏のたまたまの休みであつたことも偶然だがよかつた。

この日は、真つ青な秋の空といふのではなく、曇りではないがやや白っぽい空であつた。そのため暑くはなく、また写真にとつては柔らかい光線が好都合であつた。

暑くないと書いたが、家を出るときは、山の上はかなり寒いかもしれないとセーターなどをリュックに入れたのだが、現地ではむしろ暑くなくてちようどいいなと感ずる陽気であつた。

このような天気でも遠くの山並みは案外よく見えていた。何段階もの空色に重なる山並みは実に美しくかつた。ただし、空気の澄んだ日ならよく見えるはずの大山や日本海は見えなかつた。しかし、なによ

りその前景となる近くのなだらかな斜面はいずれも全山紅葉なのである。信州のような度肝を抜くような華やかさはないが、日差しを受けたブナ、水なら、かえでなどを中心とした雑木林の斜面は、一本一本の樹を見るよりも、全体を見たときに美しさが際立っていた。それらの中に黄色くなりかかった緑の葉が混じっているのもきれいであつた。

きよこのコースは立烏帽子山直下の駐車場に車を

とめて歩き始めた。まず比婆山の御陵を通つて烏帽子山で弁当、戻つて池の段頂上で休憩、立烏帽子山頂上を経て駐車場に帰つた。十時ごろ歩き始めて、駐車場に戻つたのは三時前だつたらうか。コースは実によく整備されていて、歩きにくいような個所などひとつもなかった。御陵に行く途中のブナ林は、天然記念物となつていたが素晴らしいものであつた。ブナ林は幹の重なりも魅力的である。また、この時

期はかなり葉が落ちていて、山道はどこも明るかつたし、遠く近くの峰々がよく見通せた。それだけでなく、あちこちで見事な展望が楽しめた。特に池の段というピークは、なだらかな高原状の頂上で樹がないため、そこからの展望はこの日の圧巻であつた。仕事で近くに來たついでに登つてきてしまったと言ふ、背広に革靴あるいはロウヒールといういでたちの三人連れも、池の段に着いて、思はずため息をつ

いていた。

妻は、最近毎日続けているウオーキングの成果で、余裕で歩ききった。

帰りに〇夫妻の勧めで、高野町の林檎園でりんごなどを買った。そこで〇夫妻とは別れたが、明るいうちにもつと紅葉が見たくて高暮ダムの周辺の県道に入り込んで一時間半ばかり山岳ドライブをした。途中で薄暗くなつたこともあつて、それほど紅葉を



楽しめたとはいえなかったが、時間を気にしないド  
ライブの楽しさを味わうことができた。

三次の『サンデイサン』で夕食をした。三次から  
吉田、土師ダム、千代田、飯室、久地、沼田経由で、  
二時間ちようどで十時五分に家に着いた。

次回は十二月二日（日）で、大竹の河平連山の予  
定。（第六回完）

## 第七回…七国見山（ななくにみやま）

（四五七・〇四m）安芸郡蒲刈町

二〇〇二年一月二十八日（月）

河平連山は十二月二日の予定が十一月三十日に変わったが、それも朝雨のため中止となった。また十二月下旬に予定した宗箇山も日程の都合で中止となり三か月ぶりの実施となった。今日も、当初は昨日

の日曜日の予定だったのだが、天気予報を見て一日スライドとなった。

ごく軽い島山のハイキングと高をくくって臨んだが、ほとんど全コース階段が作っており、特にウォーキングセンターからの登りは急登箇所が多く結構手応えが合った。妻も登りはなんとかいったが、下りで足に来ているようであった。

頂上は風は冷たかったが、日が照ると温かみがあ

り弁当も快適に食べられた。頂上からの展望は今日も素晴らしかった。『今日も』というのは、これまでの六山すべてが好展望だったからである。逆光線の海面、シルエットとなつた島々や船影、早瀬の白波、海岸の砂浜に寄せる波などいつまでも見飽きない絶景であつた。それと、山そのものは花崗岩の露出した岩山で、これもなかなか見ごたえがあつた。

初め四人とも信じられなかつたが、ややもやっぱ

いのに四国の今治付近が間近に見えているのである。それも山の稜線が見えているというのではなく、はつきりと海岸線の石油タンク群などが見えるのである。解説によると石鎚山や九州の豊後地方も見えることになっているから、空気が澄み切った日ならさぞ素晴らしいのだらう。

川尻町から、私の道路地図と『ひろしま百山』に

はまだない安芸灘大橋、××橋と二つの橋を渡って  
上蒲刈島に渡つてのアプローチであつた。

(完)

## 編者あとがき

著しくIT技術の発達した今日、かつて発表の機会に恵まれなかった無名アマチュア作家に大きなチャンスが到来しました。昨年末のAmazonのペーパーバック進出はさらに力強い追い風となっています。

故山中與隆は、定年後すぐに退職し、アマチュア

としてチェロを弾いて室内楽を好きなだけ楽しみな  
がら第二の人生を過ごしておりましたが、それと同  
時に、作家になることを目指して文筆を続けると宣  
言し、毎年のように懸賞に応募していたようです。  
それは近年まで続けられていたことがパソコンの中  
身から分かりました。傍におります妻の私は、とう  
に文筆を止めてしまっていると思っておりますの  
で、それを知って愕然としました。



ここに、山中與隆が書き残しましたものを順次発表していこうと決心しました。なんらかのきっかけで本作品をお手にとって頂けたご縁を嬉しく思います。今後発表する作品にもご期待下さい。

またブログ ([URL:https://www.duoyamanka.com](https://www.duoyamanka.com))  
への投稿の形でも発表していきたいと考えております

すので、あたたかく見守っていただければ幸いです。

二〇二二年四月

山中伶子

※1 山中與隆（やまなかともたか）の名前についで

與隆の「與」の字は「与」の旧漢字です。従って、入力時に「よ」で変換をかけると、下位ではありませんが、表示されません。

## 著者紹介

山中與隆（やまなかともたか）

一九三九年～二〇二一年

「名古屋生まれ、広島大学卒。小学校の教員暦七年、その後一般のサラリーマンを三〇数年。いまはリタイアして悠々自適の生活を享受中。大学時代に始め

た弦楽器（初めはヴィオラ、その後チェロ）を今も  
続けている一方、小説や随筆の執筆にも力を入れた  
いと思つています。

書くものとしては文学的なものから推理もの、歴  
史もの、恋愛もの、ファンタジー、社会派的なもの  
などジャンルを選びませんが、常にベースには何ら  
かの形で音楽が絡んだものにしたたいと考えています。  
ライフワークとしたい目標は、音楽を前面に出し

たもので読者の方々に小説としての読み応えと、そこに登場する音楽を是非聴きたいと思ってもらえるような、しかも私の著述によつてその物語にも音楽にも感動してもらえらるような作品を完成させたいと思つています。」

著者プロフィール(二〇一〇年五月)より

## 今後の出版予定作品

今後は、既刊の電子書籍のペーパーバック版を出版の予定です。

### 既刊作品

|| 電子書籍 ||

『都志見往来日記』 異聞

コンサートは開かれた

さまよえる視察団

蒸発の衝動

インテルメッツォ

爆発

妻が消えた



## 既刊の短編

アマールスを聞く男

オセロー

テンペスト

定年の晩

魂の三重奏

ロシアンルーレット

ささゆり

才能移転

ある三文作家が見たもの

けんか

袖ふれあうも

ミスターフエイト

峠を越えて嫁入りした女

花火見物

ある小学校教師の敗北

## 三坂峠 二話

第一話 《お蓮・勘兵衛 悲恋の墓》

第二話 《緑のトンネルで》

## 阿弥陀山

ゴーシユの華麗なる轉身

ある男の臨終

野の寂しさ

四重奏

親も子も老いて

わしや、ただの山ザルじや

リヨウコからの電話

カルテットのあゝ風景

「オセロ」の手紙版

出来る間に、出来るだけ

なぜ？

## 紀行文

広島百山と吉和冠山登山

ひとり、山を歩く

## 短編シリーズ String Fiction Series

1 弦楽四重奏団 a

2 弦楽四重奏団 b

3 親和力

- 4 トリオ・ソナタ
- 5 不協和音
- 6 解散
- 7 音楽のある生活
- 8 ビオラを弾く生活
- 9 疑問
- 10 生きがい
- 11 激情

## 12 カルテット

## 最終三作品

裸の王様は何処へ行く

むかし俺がクマだったころ

ある兵士の物語

Ⅱ既刊のペーパーバックⅡ

『都志見往来日記』異聞

コンサートは開かれた

さまよえる視察団

短編集テンペスト他

短編集2―ある三文作家がみたもの他

短篇集3―ミスターフェイトほか



---

## 広島百山と吉和冠山登山

---

2022年10月20日初版発行

著者：山中與隆

編集：山中伶子

表紙素材元：[duoyamanka.com](http://duoyamanka.com)

タイトル：湯来町伏谷の風景

©Tomotaka Yamanaka 2022

<https://www.duoyamanka.com>

---